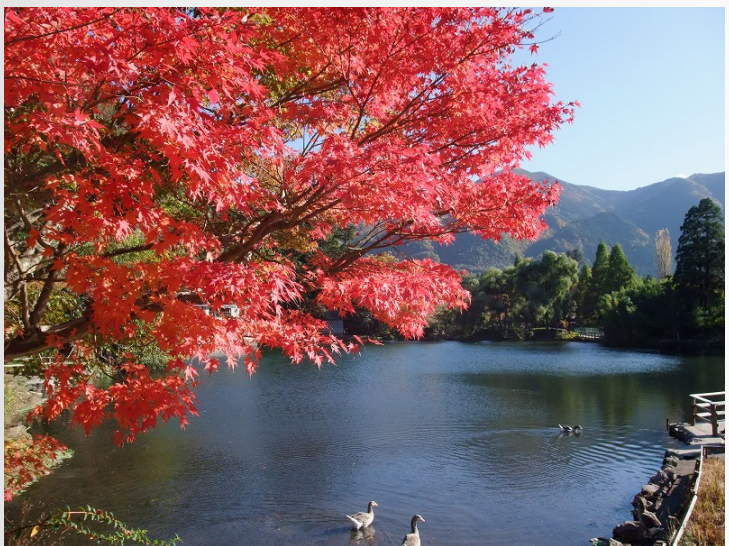


金鱗湖

由布院の自然豊かな象徴でもある金鱗湖。由布岳の下にある池という事で、大分なまりで「岳たけん下したん池（岳の下にある池）」と呼ばれていました。周囲は約400m、湖底から清水が湧き、温泉が流れ込む珍しい湖です。そのため一年を通して水温が高く、外気が下がる秋から冬にかけては湖面から霧が立ち上る幻想的な光景が見られます。この時期、盆地を包み込むとりわけ美しい朝霧の正体は、この温泉を含んだ湖が蒸気したものとも言われています。遊歩道も整備されており、湖畔をゆっくりと散策することがができます。

の水流となつて残つたものだと言われています。

岳本の池は大きな池でしたが、慶長の大地震で埋まり、小さくなりました。明治17年（1884年）に儒学者の毛利空桑むらうくわんがこの地に遊び、湖の魚の鱗が夕日に輝くのを見て「金鱗湖」と名付けたと伝えられています。



由布院盆地は昔、大きな湖であった。という蹴裂けさき

権現社ごんげんしゃのお話の後に、金鱗湖ができたお話があります。蹴裂権現が蹴り裂いた湖の壁。みるみる水が流れ、土地が現れました。この湖の底に1匹の龍が棲んでいました。急に湖の水が減ったので、神動力を失い、身を悶えながら由布山麓、岳本の地まで来て、その天祖神社そに訴えました。「湖の全ては望みません。ゆえ、この地に安住の地を与えてください。さすれば、永くこの地を守りましょう。」龍の願いは神様に聞き入れられ、岳本の池が残されました。そして、金鱗湖を源にして盆地の中央を曲がりくねって流れている大分川の上流は、湖の水が少なくなったとき、龍がのたうちまわって由布山麓の地まで登って行った跡が一本

